

---

# 戒めの奇術者

青龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戒めの奇術者

### 【Nコード】

N4622Z

### 【作者名】

青龍

### 【あらすじ】

普通の人間ならば持てない不思議な技術　奇術を使える人達の育成（？）学校、アドバンス・マジック校。その学校に通う1人の天才少女、マキ。そんなマキの周りではとんでもないことが起こり始めていた…。

## プロローグ

荒い息づかいに、左胸に宿る黄色い炎が揺れる。

元国道とあつて道幅の広いこの場所には隠れる場所があまり…かなり無い。そんな中、少女は元国道へとつながる脇道に置いてある大きな土管の陰に隠れている。

少女が隠れているそばを同じく左胸に炎を宿している男が通る。

一つだけ炎に違う点がある。炎の大きさだ。少女の炎は盛んに燃えているが、男の炎は今にも消えそうになっている。

「……。」

少女が隠れているところあたりで男は立ち止まる。その気配を気付いた少女は息をのむ。

男がとんでもない形相をして少女を探す。

男の炎が先程より小さくなり、それに比例して男の形相は険しくなる。

「おい、出てこいよ小娘！お前を殺らないと俺が死ぬんだよ！」

男はどこかに隠れている少女に向かって叫ぶ。

男の炎がまた小さくなる。

男は少女に背を向けて走り出した。

その様子を感じ取った少女は土管の陰からセミロングの髪を揺らしながら元国道へ飛び出す。

そして、

「スターライトナビゲーション。」

少女は小さな声で低く呟く。かすかに胸がズキンとしたが気にしない。

直後、少女の足元に変化が訪れる。小さな幾何学的模様の円が少女の足下に広がる。それは縮んだかと思うと、彼女のスニーカーへ

と吸い込まれていく。すべてがスニーカーへ吸い込まれ、スニーカーが光り輝きだす。それが消えて彼女のごく普通のスニーカーは、そこが分厚そうでごついスニーカーへと変わる。

少女は片膝をつき、“スターライトナビゲーション”でスニーカーと同時に右目だけの分析装置の眼鏡、モノクルに右手を添える。

「変速ギア5」

掛け声に応じ、スニーカーのギアが「5」に変わる。

その直後、少女の姿は片膝をついていた地面の上からいなくなっていた。

少女の姿は人間が出せるスピードを超えて、男へ近づいていた。

男はただならぬスピードで近づく気配に気づきあわてて振り返って攻撃に備える。

が、遅かった。

「フイニツシュ。」

男が振り返ったとき、少女は男の後ろにいた。男を貫いたのだ。

少女は男から約5m過ぎた場所で立ち止まる。

男は目を見開き、動かない。

男の炎が消えた。

男はその場に前のめりになって倒れた。

「…。」

少女は口を開かず、倒れた男へ近づく。その間に少女の炎は消えた。

「…大丈夫かな?…生きてますか?」

男のそばにしゃがみ込み、声をかけてみる。

「うう。」

生きているようだ。少女的には手加減をしたが、相手は起き上がることもできそうにない。

少女がどうしようかと悩んでいるとき、少女は目の前に倒れている男以外に気配を感じた。

あたりを見渡してみるが、誰もいない。だが感じる。とてつもない殺気を。

「…。」

倒れた男に視線を戻す。

こちらが殺気を出した相手に興味がなくなったのを感じ取ったらしく、殺気を出した奴から話しかけてくる。

「さすが、気付くのが早いですね、北神真季さん。」

後ろから声がした。その声に少女、真季が振り返ると正装に身を包んだ男が後ろに立っていた。その男は今の季節（6月）にも拘らず、真冬に着るような黒いロングコートと白いマフラーをしていた。顔は口の端が耳まで届くような仮面で隠している。

「…誰ですか？」

正体がわからない不気味な男に警戒しながら真季は尋ねる。

「ん？通りすがりの者ですよ？」

仮面の男は冗談でも言ってるのかというように右手をひらひらさせる。

「まあ、あえて言うならそちらの男の知り合いでもあります。」

ひらひらさせていた手をそのまま人差し指を立てて、真季の後ろの男を指す。

「そうだと思います。」

真季は自分の知り合いに仮面をかぶってこんな事をする人には覚えがない。なら、一つしかない。この仮面の男は真季の後ろに倒れている人の知り合いだ。現に仮面の男はそう言っていた。

真季は知り合いか確かめるように倒れている男を見た。

「…？」

倒れている男の顔を見て、真季は疑問に思う。なぜならその男はとてもおびえた目をしていたから。知り合いが来てこの目はないだろう。たとえ、どんなにその知り合いを恐れていても。

「…。」

何故こんなにもおびえるのか。その時一つの言葉を思い出す。「

お前を殺らないと俺が死ぬんだよ！」という言葉。

(…そっか…そういうことか。)

推測からすると、先程の「殺らないと死ぬ」と言っていた「死ぬ」殺される」はこの仮面の男に「殺される」ということだったようだ。また、そこから推測すると、この仮面の男は倒れている男の主人、依頼人ということになる。

「そちらの男を渡してくれませんか？」

仮面の男が言う。

真季は目をそらさず、倒れている男を見る。

「…。」

男は真季に助けを求める目をしていた。男の顔の筋肉がひきつっている。

「…別に、勝手にすればいいし。」

真季は男の前から立ち上がる。すると男の目は絶望的な目になる。そんな目に対し、真季は軽蔑の視線を送る。

男に背を向ける真季に、真季が見ていなくても仮面の男は丁寧に  
お辞儀する。

「どうも、ありがとうございます。」

仮面の男に礼を言われるが背を向けたまま、真季は振り返らない。

「いいえ。」

それだけを返すと、歩き出す。早く帰って寝たい、そんな気持ち  
が真季の中にあった。

すぐ後、後ろから倒れた男のものと思われる断末魔が聴こ  
えた。

「…朝か…。…ねむっ…。」

朝の明るい光で真季は目が覚める。あまり寝た気がしない。

昨日の戦いからあまり時間はたって…。…いた。

今の時間はA M 7時50分。

「学校：遅れちゃう。」

今現在真季が仮として通っている学校は九重学園と言って、近所ですごく有名な学校だ。どっちにしる、明日から真季はこの学校から来ないためそんなことは別にどうでもいい。

真季は遅れちゃうと言っただけながらも、ゆっくりと学校へ行く支度をしている。

A M 8時5分、真季は家を出た。出る前に家の中にもう一人の学生がいるか探してみたがいなかった。

真季の家から学校まで早歩きでも30分ほどかかる。登校完了時間は8時25分まで。このままでは当たり前前に遅刻をしてしまう。

最後の登校日に遅刻するのは悪い気がする。親に送ってもらえばいいという発想が普通は、普通は出てくるだろうが、真季には送ってもらえる父や母はいない。真季は訳ありだから。

「スターライトナビゲーション。」

真季の足下に幾何学的模様の円が出てきたかと思うと、それはスニーカーへとあつという間に吸い込まれていき、スニーカーが光り輝く。それが消えると、真季の靴が分厚いスニーカーへと変化。

「変速ギア8」

ギアが変わる音がした後、その場から真季の姿が消えた。

「8」は昨日の戦いで使ったギア「5」よりも圧倒的に速い。そこで真季がスターライトナビゲーションを使ったと知っていなければ見るのは難しい。

それから約2分、真季は学校に着いた。

「8時7分：間に合った。」

校門の前で止まり、スターライトナビゲーションを解く。

かなり早く学校に着いた。もしも朝の挨拶のために先生が校門に立っていたとしたら、真季のここまで来るスピードにびっくりしていただろう。しかしあいにく、先生も生徒も誰一人、校門から生徒玄関までいなかった。

真季はあくびをこらえながら校門をくぐる。

「おい、マキー！」

よく知っている声に呼び止められて真季は来た道を振り返る。

「レン。」

レンと呼ばれた少年は真季に向かって走ってきた。家を出る前に確認した学生、神谷れんだ。彼もマキと同じく訳ありである。

真季に追いつき、一呼吸を置くレン。

「せこいぞ、スターライトで学校来るなんて。」

スターライト…それは彼なりにスターライトナビゲーションを略した言葉である。

「起こしてくれないレンが悪い。」

再び生徒玄関へと歩いていく真季。

「起こしても起きねーんだもんよ。しかも昨日一人で戦ってきただろ…？」

真季を起こしに行ったときに気付いたのだろうか、ところどころにある真季の擦り傷を指してれんが言う。

「何？教えてくれなかったことにいじけてんの？」

ちよつとからかうように真季は言う。

「別にそんなんじゃないし。」

頭の後ろで手を組み、足早に真季をぬかす。真季からはどう見てもいじけているようにしか見えない。

(…やっぱいじけてる…。)

れんの様子を見て真季は心の中でそう思い、口の端を軽く上げる。

「っ！別にいじけてんじゃないぞー！」

真季が笑ったのを感じ取ったのかれんが勢いよく振り返る。その時、れんの重力に逆らっている髪が揺れる。

「別に、そんなこと思ってないし。」

心とは裏腹なことを口に出す。

「本当かよ。」

疑い深いれん。

「本当。ん、そつだ。学校終わってから昨日のどこ行くけど…来る？」

疑いから逃れるように真季は提案。うまく逃れられればいいのだが…。

「昨日のどこ？」

「そ、戦ったところ。」

「行く！」

れんはまんまと真季が仕組んだ提案にはまって、喜んで返事をする。

「ここにいるのは明日の朝まで。でも今日は帰りの準備がある。

だから放課後、さつさと行くよ。」

真季とれんはもとはこの地域にすむ人ではない。あるところからある理由で約一週間前にここに来た。そして、とある任務をクリアしたため明日に帰る。

「おう。…ところで…戦った相手はどうしたんだ？」

疑っていたことをきれいさっぱり忘れているレンがきく。

「さあ…。」

適当ともいえる…実際にあの男がどうなったか細かいところまで分からないので真季は曖昧な返事を返す。

「なんだよ…『さあ…』って…。」

真季の回答に少し不満を持つれん。

「だって本当に分かんないんだもん。」

「…まあいいや。あともう一つ。…今さら聞く必要もないだろうけどさ、その戦い…勝ったのか？」

「当たり前。余裕。」

本当かよと言いたいような目でれんが視線を投げてくる。その視線は真季の擦り傷に向かっている。擦り傷は男との戦いでできたものであるが、男にやられたものではない。他に怪我をしていない真季は、つまり無傷で勝ったということだ。

「スターライト使ったのか？」

新たに質問を投げってくる。

「うん。」

「他は？」

「ライトボルト。」

れんの目が驚きで見開かれる。

「おい…そんなに使ったのかよ…。寿命なくなるぞ。」

れんが注意する。真季はその言葉に何故かイラツとくる。多分…分かってるように言われたからだろう。自分のことを知らない癖に知っているような感じで気取って注意する、真季はそんなのが嫌いだ。自分には理解者は必要ないと思っている。

「別に、どうでもいいし。」

それと、真季は自分の命はどうでもいいと思っている。…それ以上他人の命も。デイフエンドできるなら…任務のためなら…。真季はそう思っている。どうせはいつか、尽きる命だ。

「ほつといてくれない？とがめられるの…いやなんだ。」

「…。」

れんは言い返さずに黙りこんでしまった。

そんなれんを放って真季は生徒玄関へとはいつて行った。

「もしもし、先生？元気ですか？」

学校が終わり、家でレンは電話をかけている。レンが言う“先生”とはレンの師匠だ。レンの師匠は若いにもかかわらずとても強く頭がとてもいい。

『毎日かけてくる癖に…同じことを聞くんだね。他のことも聞いてあげないと。』

師匠はきつと電話の向こうで苦笑いをしているだろう。

「ん…じゃあ、ちゃんと飯食ってますか？」

『安否確認してどうするの！？はあ…まったくレンは…。もっと』

成長してくれよ…。」

師匠はやりわりとしたツツコミをして、レンの質問にため息をつく。

「成長しますよ、ちゃんと。背だつて大きくなってる！」

『そつちの成長じゃないよ…。精神がしてくれって言ってるんだよ。』

天然なのか、ふざけてるのか…そんなレンに向けて師匠はため息で返してくる。一向に戦闘力や精神が成長しなideきの悪い弟子だ。「十分成長してると思いますよ。」

『……。』

成長していない弟子が言う成長。それは何が成長しているのか…。

「先生、聞いてますか？」

『ああ、聞いてるよ。だけどそれに関してのコメントは控えさせていただく。』

きつとコメントしたら面倒くさい方面へと向かうだろう、と考えた師匠は話を変える。

『いつもは10時過ぎにかけてくる癖に今回はどうしたの？』

そう、レンは師匠に電話をするときは10時過ぎに電話をかける。それは師匠の修行の邪魔にならないようにするため。しかし今日は普通に邪魔をしている。現在時刻はPM7時過ぎ。

「あ、そうでした。」

レンは一度言葉を切り、受話器を持ちかえる。

「昨日真季がターゲットの男を倒したんですよ。」

『おつ、それはすごいな。僕が聞いたなりじゃマキちゃんとターゲットの相性はマキちゃんからしてみれば最悪、ターゲットからしてみれば最高なんだよ。マキちゃん怪我してた？』

そうきかれてレンは近くで出かける支度をしているマキを見る。

「擦り傷だらけ。」

『擦り傷…ならターゲットにやられた傷じゃないね。ターゲットは気配を見つける天才らしいんだ。だから殺人暗殺鬼と呼ばれてい

たよ。… だけど最近では気配をうまく隠せる人が出てきてターゲットの力は使えなくなりつつある。だから… 何だと思う？」

ヒントまで出し、レンに続きを言わせようとする師匠。

「だから… 一度見つけた時点で殺す？」

『そう、その通り。だからきつとマキちゃんの擦り傷はどこかに隠れたりしたときについたものと思うよ。つまりこの戦いはマキちゃんの圧倒的勝利だったと分かるよ。』

師匠の分析をレンは聞いていてふと思う。

「… 相性悪いのに勝つなんて…」

『すごいよね。マキちゃんの力は計り知れないな。遠くない未来、“5つの砦”の一人になるかもね。』

何故か師匠がうれしそうに言う。“5つの砦”… 数の通り、選ばれるのは最強の力を持った五人。その中にレンの師匠も入っている。つまりはレンの師匠、タイトはとても強いということ。それはレンの比べものにならないほど。力を計り知れないマキも例外ではない。「そんなに強いんだ… マキは。」

マキを見ていると、マキが視線に気づき顔を上げる。

「レン、行くよ。」

「おう。」

受話器から耳を離してマキに言う。

「じゃっ、先生。続きは土産話で。」

一方的にだがレンは言うと言話をきる。そして先に出て行ったマキを追いかけて行った。

「… にしてもここ、本当に人気ないな…。地味に寂しい…。広くせに隠れる場所少な〜し。」

昨日、マキがターゲットと戦った場所の元国道に来てレンが呟く。

「気配を消すのは難しくなかったけど… 隠れるのが難しかった。」

そう言っているマキだが、難しいという感じが言葉内に全然こもっていない。

「師匠が言ってたぜ。ターゲットは気配を見つける天才なんだって。」

「…道理であんなに遠くまで追いかけてきたんだ…。」  
少し眉間にしわを寄せて考えるマキ。

「でも隠れ通して勝ったんだろ？」

「ターゲット、慌てたから気付かなかったんじゃない？殺される的なこと言ってたし。」

あたりを見渡しながらマキは言う。何かを探しているようだ。

「…それってマキに殺されるってことじゃね？」

「それはない。勝負を仕掛けてきたのは向こうからだから。」

「…何か探してるのか？」

先程からずっとキョロキョロしているマキにきく。

「探してるわけじゃないけど…おかしい。」

「何が？」

そう言いながらマキと一緒にあたりを見回す。レンからすれば特別におかしいことはない。

「全部。昨日戦った男、殺されたはず…。」

そのはずなのに元国道には血も死体も何一つない。たとえ持ち去られて死体がなくとも血はあるはず。また、殺されていなくても血があるはずだ。

「殺された？マキがやったのか？」

マキの考えを遮るようにレンが鋭い目つきをしてきいてくる。

「違う。…知らない人が殺った。」

レンの目を見ないでマキは言い、歩き出す。

元国道だった道路のラインは消えかけ、脇道の草は伸びきり道路にはみ出している。血痕は全く見当たらない。

「…さっきの殺されるってやつか？」

「そう。戦い終わってから相手の状態を確認したら別の男が来

たの。それで、ターゲットを渡せって言うから渡した…ら、ターゲットは殺された。」

細かいところ、殺されたかどうかなんてマキには分からない。後ろから聴こえた断末魔と鈍い音から想像した結果だ。

「でも何も無い…。」

この元国道だけが賑わいを見せる他の通りと違う。この場所から賑やかな通りは想像ができないくらい何も無い。

「だから…っ！」

不意に気配を感じる。

「？何だよ？」

急に身がまえたマキを見て、レンが尋ねる。レンは気配を感じないようだ。

「昨日と同じくらい気付くのが早いですね、真季さん。ところで隣にいる方は誰かな？」

どこからか声がする。昨日の仮面の男の声だ。声の場所を見つけようとするが見つけれられそうもない。狭い路地裏で金属パイプに声を反響させて響いてくるみたいに、いろいろな所から一斉に声が聴こえてくる。

「パートナーの神谷れん。炎を持つ。」

探すのをあきらめてどこに向けてでもなく全体に聞こえるように大きい声で回答する。

「…おい、マキ…。誰に話してるんだよ…？」

いきなり自分のプロフィールを言われ、レンは驚いている。

(…レン、聴こえてないのか…。)

「…姿を現してくれませんか？パートナーが何も聴こえてないみたいで。」

しばらく静まり返った後、仮面の男の姿がマキの前方5m程の所に現れた。

「…」

レンは仮面の男の姿を見て、びっくりして後ずさる。

「そこまでびつくりしますかね？…まあ…無理もないですね。この格好じゃ。」

仮面の男は昨日と同じ、ロングコートを着て白いマフラーを首に巻いている。普通に考えれば悪い格好（季節感を除けば）ではない。しかし、いい人が誰がどう見ても…仮面の男はいい格好をしていない。黒いロングコートは汚れてヨレヨレで対照的な白はずのマフラーは血で真っ赤に染まっていた。

「…前回も思ったんですが季節感ないですね、その格好。暑くないですか？」

「そうでもないですよ。私は常に冷えているのでね。」

仮面の男は赤く染まっているマフラーを仮面の口のところまで上げる。マキやレンから見れば、気味が悪い上にとっても暑苦しい格好だ。小さい子供が見たら即で泣き出すだろう。

「またところですが、マキさん。訊きたいことがあるのですがいいですか？」

「…はい、構いませんが、あなたの名前を教えてください。」

こちらの名前は何故か知っているが、こちらは向こうの名前も正体も知らない。

「おっと…それは失礼しました。私の名前はシルラ。どうぞよろしく願います。」

シルラと名乗った仮面の男は体を二つに折り曲げて丁寧にお辞儀をした。

「で？訊きたいことは？」

シルラにお辞儀を返し、シルラの訊きたいことを訊く。

「マキさん、ちょっと君を調べさせてもらったよ。そこで疑問に思ったんだ。何故、君のような優れた奇術の使い手があんなごく平凡な学校へ？」

自分には関係ないと地面を靴でつついていたレンだったが、シルラの質問を聞いた瞬間顔を上げる。

「…よく調べましたね。」

話をそらそうとするマキ。

「まあ…君があのお男を倒したのが不思議だね。あんな熟練した大人をたやすく倒してしまうなんて思ってもいませんでしたから。だから学校を調べてみたら…九重学園の生徒ではなくアドバンス・マジック校生じゃないですか。驚きましたよ。…で、軽く話をそらしましたね？無理に答えてほしいわけではないのですが…質問するの…まずかったですか？」

マキのことにすっかり答えつつ、話に流されないシルラ。マキよりも上手だ。

「…いえ…まずくはないです…。」

ここで長い沈黙が訪れる。

「……………ただの……………ペナルティ…罰です…。」

マキは小さな声で言う。

「…。」

それにシルラは何も言えなかった。

## プロローグ（後書き）

自分でも予想以上に長くなったプロローグです。

今回はとても見づらかつたり…すると思いますが…次からは細々

（？）と頑張るので…どうか気長にお付き合いください。

## 1 - (1) ペナルティ

「はい、ペナルティお疲れ様でした。」

次の日、昨日まで通っていた九重学園と違う学校、アドバンス・マジック校の校門でマキとレンは迎えられた。“ようこそ”ではない迎え。そして“ペナルティ”。昨日シルラと話していた時に話した“ペナルティ”だ。

大きな学校を背に、迎えたのはリザ（先生）。しっかり者で長い髪を後ろで団子にしている。生徒に人気の先生だ。

「後で報告してもらいます。」

眼鏡を押し上げてリザは言う。

「お疲れ様じゃねーじゃんかよ。」

レンはうんざりした顔で頭をふる。

「レン君、口を慎みなさい。」

リザの眼鏡が鋭く光る。まるで眼鏡がリザの意思のようだ。

「先生、実は眼鏡が本体だったりしますか？眼鏡外したら何もなかったりして。」

レンのあまりにも失礼な物言いにリザの眉がピクリと動いた。怒る前の合図だ。

「先生、失礼しました。」

マキはレンの言った無礼に対し、リザに謝罪する同時にレンの脛を思いつきり蹴り飛ばす。そして蹴り飛ばされたレンはあまりの痛さに声を上げられずに足を抱えてしゃがみ込む。

「報告は私が入ります。」

転げまわるレンをよそにマキは何事もなかったように言う。

「いや、レン君に報告させなさい。」

転がっているレンを見ながらリザは何事もなかったように言う。

「何もしてないんだから。」

その言葉を聞き、レンは脛を押さえながら起き上がる。

「何もしていないんじゃないじゃなくて仕事を全部盗られたんすよ!」

「でもやっていないのは事実。報告はレン君に任せます。」

「…。」

レンの抗議は認められず押しつけられる。

「まあ、2人共帰ってきたばかりだからまずは寮に行つて休みなさい。」

さっきまでの業務の顔から優しい顔を見せるリザ。リザのこういふところが生徒に人気がある。

(つーか…俺の反論させてくれねーのかよ…。)

少し虚しくなるレン。

「1時間後、制服を着てブラックルームに来なさい。」

リザはそう言うつと学校の中へ入つていった。

もうレンの反論は認められない。レンは仕様がなく諦める。

「…マキ、どうする?寮戻つた後どっか行くか?」

先生が去り、マキとレンの2人になったところで脛の痛みが治まったレンが訊く。

「んー…どうしよう…。寮に戻つても皆学校だし…。」

そう、マキたちは学校(授業)があるのにペナルティーへとまわされていたのだ。

「それにもう昼だしなー。じゃあ昼食いに行くか?」

レンが上を見上げる。つられてマキも見上げる。太陽はほぼ真上にある。

「…そうだね。じゃあ行先は?」

「んー…着替えて集合して…それから決めようぜ。」

とりあえず後回しのようだ。

「うん。」

1・(1) ペナルティ(後書き)

…次の話も入れようと思ったたりしたのですが長すぎて入らず…カ  
ット！しました。

プロローグで長くしないように気をつけると言っのに…早速長  
くなりそうでひやりとしました…。というか…次の話をつけてでし  
か題名が浮かばなかったんですよ！

つまり！

次はとても(？)長くなります…。

## 1 - (2) 階段と戦い

先程見ていた真上とは反対の下を見る。下には長い長い階段が広がっている。ちなみに上にも広がっている。

「…腹…減ってんのにさ…運動かよ…。しかも…制服…着たばっか…なのに…汗…だく…。」

前かがみになり、膝に手をつき、汗をたらし、息をきらせ、切れ切れながらも言いきる。

「下までまだまだあるよー。」

レンの隣で息も切らず立っているマキが言う。チェックのミニスカートに膝まであるコートの制服には汗一つもついていない。

「ああ…学食の方が…良かったかも…。」

「じゃあ戻る？」

マキは学校がある階段の上の方を見る。マキにとっては上ることも下りることも苦ではない…が、

「いや…このまま下りる。」

レンにはどっちにしる苦のようだ。引き返して学食のある食堂に行っただとしてもすでに終わっている可能性もある。

少し息切れが治まり、レンは深呼吸をする。それなりに高い所にいるため良い空気だ。

改めて下へと続く階段を見る。

「…。」

果てしなく下へと続く階段。うんざりするがここまで来てしまったのだから仕様がなない。

「レン、がんばる？アマ校生の最終目的は一気に上り下りができること！息切れしても続けよう！」

マキの言うとおりで。アマ校生の最終目的は息切れせずに上り下りすること。これはアマ校で必ず身につけなくてはならない基礎体力だ。

ちなみにアマ校生はアドバンス・マジック校生徒の略だ。(アマ校はアドバンス・マジック校)

嫌々ながらもレンは再び1歩踏み出す。

「じゃ、私先行ってるね。がんばれー。スターライトナビゲーション。変速ギア3」

「おい、マキ！待てよ！」

レンが言葉を最後まで言い切った時にはすでにマキの姿は見えなくなっていた。

レンから別れて約30秒後、マキは地上に着く。

「…ベストタウン。久しぶりだな。」

“タウン”…町とは言えず、どちらかという村に見えるベストタウン。アマ校の階段から少し離れた所にある屋台の先頭。そこから後ろ(アマ校とは反対方面)にはたくさん屋台がずらりと並んでいる。毎日このように屋台があるため、毎日祭りをやっているように見える。

マキはミニスカートのベルトに引っ掛けてある懐中時計を見る。

約束の時間まで残り30分。

「…これじゃあ昼食ゆつくり食べられないな…。」

レンがあのかペースで下りてくるとしたら地上まで10分ほどかかるだろう。

「どっかで買ってこよ。」

後ろを振り返って階段の上の方を見てみたがレンは見えない。

マキは屋台の群れに向かって歩き出した。

屋台には様々なものが売っている。家電製品に食べ物・武器など、屋台とは思えないようなを売っている屋台が多い。

「よっ！マキちゃん、おかえり！」

声を掛けられ、その方向へ振り返る。

「あ、フッドのおじちゃん。」

屋台を経営している一人でマキの行きつけの屋台の主だ。

「どうだったかい？ペナルティで日本？に行ったのは？」

「ううっ…訊かないですよ…。ペナルティなんだから。」  
そう言いながらマキはフツドの店に近付く。

「ハッハッハ。そうだったね。ペナルティだもんな。」

フツドは愉快そうに笑う。マキは“ペナルティ”を2度言われ（しかも2度目はわざとらしくかった）、言葉が痛く胸に刺さる。フツドは少し意地悪だが決して悪い人ではない。

「ところで…レン君はどうしたんだい？」

「学校の階段と戦ってるよー。」

歩いてきた方を振り返り、ある程度遠くからでも見える長い長い学校へと続く階段を見る。

「おう、それはご苦労だなー。帰ってきたばっかだったのに…あの長い階段と戦ってるのか。…お、そういえばマキちゃん。あの学校の階段、何段ある数えたことあるかい？」

屋台の物色を始めたマキにフツドが訊いてくる。

「ううん、数えたことないよ。気が遠くなるようなことだからね、やりたくないよ。」

半ば上の空で答えるマキ。

「おう、そうか。ならおじちゃんの話聞いてくれよ。」

嬉しそうに言う声に一度物色をやめてフツドを見る。

「たぶんあの階段を数えたの、学校…いや、世界初だよ！あの階段、3775段もあるんだ！」

両手を広げて大きな声でフツドは言う。

「…地味に数えたの？」

「そうさ！何度あきらめかけたことか。でもめげずに頑張って数えたのさ！ああ、おじちゃん学校の七不思議の一つを解いちゃったよ。すぐくないかい？」

胸を張って力説するフツド。

「…それ…学校のパンフレットに書いてあるよ。学校の歴史でもやったし。」

目を細めてフツドを見た後、マキは再び物色を始める。

「それに七不思議じゃないし。…てかこの学校に七不思議なんてないよ？それに階段の数、3775段じゃなくて3776段だよ。」  
フツドの表情も動きも全てが止まった。

…ちなみにフツドの屋台はアドバンス・マジック校生…アマ校生に人気の店である。

アドバンス・マジック校はマキが使う“スターライトナビゲーション”など、奇術を使う生徒たちが集う学校だ。具体的に奇術とは不思議な技術のことを示す。不思議な技術…通常の人が持つていない特殊な人が持つ特殊な力。マキ達アマ校生はこういった奇術を悪用する奴らを排斥する義務を持つ。

「じゃ、これください。」

全てが止まったフツドに向かって大きいパンケーキを指して言う。

「はい、200円ね。」

接客態度がダメになった（魂が抜けたような）状態のフツドにマキは200円を渡す。

「ありがとう。」

マキは紙袋に入れてもらったパンケーキを受け取ってフツドの屋台を離れる。

「あ、そうだ。」

マキは立ち止まると200円を右手に持ってマキに紙袋を渡した状態で止まっているフツドの方に振り返る。それに気付いてフツドも首だけをマキの方に向ける。

「質問の仕方、変えた方がよかったね。数えたことあるかい？じやなくて知ってるかい？なら無難だったね。」

フツドがマキをじっと見る。それから

「ああ、参ったよ。マキちゃんには勝てないね。はい、これオマケ。」

再び動き出したフツドはマキにチョコの入った細長くてカリカリするクロワッサンをビニール袋に入れて渡す。

「やった ありがとう。」

嬉しそうにマキは受け取り、紙袋の中に入れる。

「ま、はじめから賢いマキちゃんに勝とうなんて思っても」

フツドが途中で言葉を切る。マキに目で静かにと言われたからだ。

「何か聴こえるのかい？」

マキの邪魔にならないようにフツドは声をひそめて訊く。それにマキは無言で頷いた。

フツドにとつてはこの通りで騒いでいる人の声しか聴こえない。

と、遠くから悲鳴が聴こえた。

騒がしかった声が一斉に静まり返る。

「フツドのおじちゃん、ちよつとこれ持ってて。」

マキはついさつき買ったパンケーキと貰ったクロワッサンが入った紙袋をフツドに渡す。

マキは悲鳴が聴こえた方を見据える。悲鳴が聴こえた後、通りにいた買い物客は端に避けていたためすぐに敵と思われし人物を見つけた。敵は一直線に、それもすごいスピードでこちらへと走っている。敵の右手には手を覆うように見える黒く輝く剣があった。

(敵は女…目的はアマ校か…)

アマ校はよく悪人に狙われる。なぜなら悪人を排斥する学校だから。排斥されないためにこのようにアマ校を潰そうとする悪人が現れる。

敵はマキとの距離を縮めていた。もつとも、マキなど眼中にないだろうが。

(フツドと髪でこちらからは目が見えない…。どこかの民族の奴か?)

敵の女はマキの見たとおり、フツドを深く被っていて、おまけに前髪でこちらから表情はうかがえない。マキが民族だと思ったの後れ毛にピン止めのようなものが向きをそろえずに付いているからだ。敵はやはり、マキなど眼中になかったらしくマキの横を颯爽と通り過ぎようとする。

「待て。」

マキは敵がちょうど真横に来た瞬間、敵の腕を掴む。走っていた敵は不意に腕を掴まれたため勢い余って転びそうになる。しかし相当熟練した人なのだろう。体勢を立て直すと同時に右手の剣でマキに斬りかかる。マキは敵の腕を離して剣を避けて宙を一回転し、敵と距離をとる。

「ターゲット、オン。」

敵が小さな声で呟いた。

マキと敵の左胸に炎が宿った。どうやら敵は一旦標的をマキに変えたようだ。

(…どっちにしろ戦闘は避けられなかったか。)

警告をしようと動きを止めさせたのに標的にされてしまった。

ため息をつきたくなる衝動に駆られながら突進しながら斬りかかってくる敵を紙一重で避ける。敵はまさか避けられると思っていなかったらしくそのままマキの背にあった屋台に向かって突っ込み、屋台を大きな音とともに潰してしまう。

「…っ。」

敵は屋台の残骸の中から起き上がり斬りかかってくる。

(このまま避けたら…。)

一瞬敵から目を離して後ろを確認する。今マキの後ろにある屋台はフツドの屋台だ。また敵が突進してきてマキが避けたのならフツドの屋台は確実に潰れるだろう。フツドは心配そうにこちらを見ている。

「っ、くそっ！」

避けることはできない。たとえ他人の命なんてどうでもいいと思っただけでも、フツドにはかなりお世話になっている。だから悲しむ顔は見たくない。しかしスターライトナビゲーションを発動させようか迷っている自分がいる。前回、シルラに殺された男と戦ったときに薄らと感じた痛みを思い出す。これでは命乞いをしているみたいだ。

(ここでためらっている暇はない！)

「スターライトナビゲーション！」  
体が揺さぶられるような感覚がした。

光り輝く幾何学的模様の円が浮かんで光がマキのスニーカーへと吸い込まれる。そしてお馴染みの底が分厚いスニーカーが現れる。

「っ…。」

おまけにめまいもしてきた。

「変速ギア2」

頭を振って意識を覚醒させてギアを変える。突進しながら斬りかかってくる攻撃をマキは避け、敵の背後にまわりフツドの屋台へと突っ込んで行きかけている敵の腕を掴む。先程と同じように敵は勢い余って転びそうになる。次は敵に斬りかかられる前に敵の腕を離すと敵は横ざまに倒れた。

「…。」

マキは敵との距離をとり敵を見る。やはり敵はすぐに起き上がった。炎の強さは変わっていない。

(…やっぱりこれだけじゃダメか…。なら、次で決める。)

「変速ギア5」

ギアを変えてマキは敵に突進をする。そんなマキの攻撃を当たらないようにするために敵は今自分が立っている位置から少し横に動く。突進はまっすぐにしか進めない。向きを変えられたとしても相手の位置を細かく測定することはできない。しかしマキはそれを出た。モノクルのおかげだ。分析して敵が正面になるように修正する。敵は避けられないと悟り剣を構える。敵とマキの距離が5mに満たなくなった時、敵はマキに向かって剣を突き出す。それを分かっていたかのようにマキはジャンプし、その剣を力強く踏んで全体重をかける。

「ぐっ…。」

重みに耐えられなくて呻く。

全体重をかけた後次は剣を足場にして体を後ろに倒してジャンプ。

「ぐあっ!」

マキの足が敵の顎を蹴り上げた。敵は上にと体を投げ出される。

「変速ギア9！」

地に着地してギアを変える。そして地面を蹴り敵を追って宙へと舞う。あっという間にマキは敵に追いつき

「フイニツシユ。」

空中で勢いをつけて一回転と同時に敵の鳩尾にかかと落としを見舞う。敵はマキが追いかけてきたスピードを超えて地上へと落下する。

敵が落ちた所には小さなクレーターができていた。遅れてマキが地上へ降りる。見ると敵の炎は消えていた。

「…。」

買い物客や屋台の亭主呆然とマキと敵を見ている。

「うう…っ。」

敵が呻き声をあげながら立ち上がる。手は腹を押さえている。

「…。」

敵は憎々しげにマキを睨んだ後たどたどしい足取りで来た道へ引き返していった。

通りから敵の姿が見えなくなると買い物客や屋台の亭主から大きな歓声が上がった。

「マキちゃん、ありがとう。」

フッドがマキが預けたパンケーキとクロワッサンの入った紙袋を持ってやってくる。

「店を守ってくれて。次来た時はサービスするよ。」

フッドはとても嬉しそうな顔で言った。

「うん。ありがとう。」

そう言いながらマキは紙袋を受け取る。

「そろそろレン、降りてくる頃だからまた今度ね。」

荷物を片手にフッドに手を振る。

「変速ギア1」

ギアをチェンジ。「1」は他のギアの中で一番遅いものだが遅い

と言っても普通に走るよりは速い。マキはあっといふ間に通りから姿を消していた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4622z/>

---

戒めの奇術者

2011年12月17日13時00分発行